

心豊かでたくましい児童生徒を育む

小中一貫教育をめざして

シリーズ えでゆれば vol.19

小中乗り入れ授業による魅力ある授業づくり

先月号では、品川区の小中一貫教育導入による成果をお知らせしました。

また、これまでの連載では、小中一貫教育の導入により、子どもたちの教育環境がどのように変わっていくのかをお伝えしてきました。

今回は、小中の接続期である中等部（5～7年生）で実施する、教員の乗り入れ授業についてお伝えします。

子どもたちのギャップ解消のために

小学校では全ての教科を1人の先生が指導する「学級担任制」となっています。

そして、中学校では教科により指導する先生が入れ替わる「教科担任制」となっています。

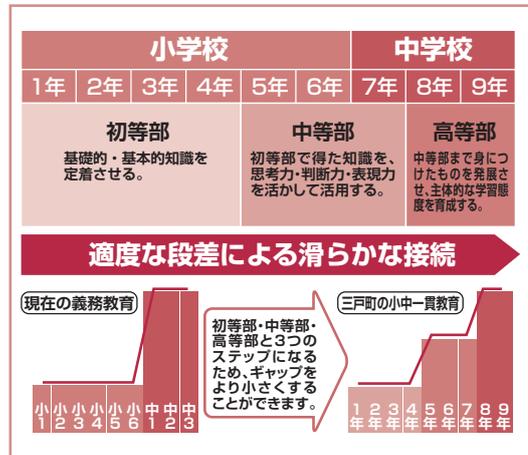
そのため、小学校6年生と中学校1年生の間に大きなギャップが生じており、これが「中1ギャップ」の原因の1つと考えられています。

三戸町の小中一貫教育では、従来の小学校6年・中学校3年の「6・3制」を、初等部・中等部・高等部の「4・3・2制」に区分（図1）し、滑らかな接続が行われるよう（ギャップが解消されるよう）発達段階に応じたきめ細やかな教育を行います。

特に接続期にあたる中等部のうち5・6年生に対しては、一部教科担任制や中学校教員による乗り入れ授業を行う予定です。

先生方の専門性を生かした授業により、中学校の学習の土台となる学力の定着や、中学校の授業スタイルへのスムーズな移行などの効果が期待されます。

図1 4・3・2制の区分



教員の免許制度

通常、小学校や中学校で指導するために、それぞれの校種で異なる免許状が必要となるため、乗り入れ授業を行うためには小中両方の免許を持っているなければならないという誤解があります。

文部科学省では、小中どちらかの免許があり、3年以上の教職経験がある場合は、他方の免許を取りやすくする制度を設けました。また、中学校の免許がある場合は小学校の相当する教科を担任することができます。これにより、制度を拡大しています。これらの制度により、教員の所持免許に

関わらず乗り入れ授業を行うことが容易になりました。

特別授業と乗り入れ授業

9月10日、三戸小学校の6年1組の児童を対象に、外部講師を迎えた特別授業として理科の実験授業が行われました。

講師 野呂茂樹先生
(板柳町少年少女発明クラブ顧問)
内容 月の満ち欠け

この内容は、9年生（中学3年生）で学習する「月の運動と見え方」と密接に関係し、中学校の学習の土台ともいえる内容です。

野呂先生は、自ら開発した教具を使いながら、地球・月・太陽の距離



オリジナルの教具でビー玉を地球、まち針のピンを月に見立て、位置関係と大きさを伝える野呂先生

と大きさ、それぞれの位置関係と月の形の変化を分かりやすく伝えました。



◆授業を受けた児童・教員たちの感想

「なぜ星は明るい時には見えないのか」を調べた実験が面白かったです。

水色の画用紙に星をはさんで明らかに透かしても見えなかったのに、内側を黒く塗った筒でのぞくと星が見えてとてもビックリしました。

地球からは同じ大きさに見える月と太陽だけど、実験道具を使って実際の距離と大きさをイメージできました。大きく膨らませた風船を太陽に見たて、廊下の端っこだまで離れたので、太陽はとても大きいけど、とても遠くにあるから小さく見えることが分かりました。とても分かりや

すかったです。

理科は得意ではなかったけど、今日の実験で少し好きになりました。

◆学級担任

授業の最初に行った、日中に星が見えない理由を教える実験で、児童は心をぐっと掴まれたようです。「まさか!」と思うことが実際に起こったことで、普段はおとなしい児童も積極的に確かめていたのが印象的でした。

また、観察・実験で児童が苦戦していた時、的確なタイミングで教具を与えたことで最後まで興味が途切れませんでした。子どもたちに理科の楽しさを味わわせていただき感謝しています。

◆中学校理科教員

子どもたちからは、理科の授業で大切にすべき「すごい!」「なぜ?」「分かった!」という声がたくさん聞かれました。

子どもたちから興味関心を引き出し、理科の世界に没頭させるための教材・教具の準備や問いかけの工夫など、参考になることが多い素晴らしい授業でした。

◆三戸地方教育研究所 指導主事

通常であれば2時間扱いの内容を1時間で行ったにもかかわらず、多くの児童に分かる喜びや、理科の楽しさを伝えた指導技術には驚きました。

また、児童全員を授業に集中させる語りかけ、発言を引き出す質問の仕方など、見習うべき点が非常に多い授業でした。

この「月の見え方」に関する授業は、三戸小学校の6年1組だけでなく町内全ての小学6年生に対し、中学校理科教員による乗り入れ授業として行われました。

中学校教員の専門性を生かした乗り入れ授業は、理科に限らず他の教科でも実施していく予定です。また、同じく接続期である7年生の授業には、小学校の教員が補助的に参加することで、小学校時点でのつまずきに対応することが可能になるため、確かな学力の定着につながります。

これらの乗り入れ授業を効果的に行うためには、小中学校の教員が事前に打ち合わせをし、授業の後は子どもの様子を見て感じたことを話し合うなど、多くの時間が必要です。新校舎に完成し、2学期から使用し

ている小中共用の職員室は、この打ち合わせを容易にします。

このメリットは、施設一体型となる三戸小学校と三戸中学校のみならず、連携型の斗川小学校にも当てはまります。関連する学習内容を小学校でどのように指導しているか、小学生はどのような反応を示すのか、中学校の先生はこれらを理解した上で斗川小学校での乗り入れ授業を行うことができます。

こういった積み重ねが、子ども達にとって魅力ある授業づくりにつながっていくものと、大いに期待しています。



小学校の先生の机が並び、半分ほどのスペースが空いている小中共用の職員室